

小城三月（小さな街の三月）

蕭 紅

（訳 小林美恵子）

一

三月になって野原は緑色になった。苔のような緑がここかしこに顔を出している。街外れの野原の草は幾重にも曲がってようやく地面に顔出さなくてはならず、てっぺんにまだ破れた種皮をくっつけたままちょっとでも高くと伸びた芽はうれしそうに土から突き出てくる。牛を追う子は垣の土台の瓦石をめくり上げ、一本の草芽をみつけると、家に帰って母親に告げて言う。「今日草の芽がでていたよ！」 母親もびっくりして、うれしく言う。「ああ、きっと日当りのいい場所なんだね！」 搶根菜の白い丸い石のような種が地上に転がっているのを田舎の子供たちはたくさんたくさん拾う。タンポポが芽を出し、羊はメエメエ鳴き、カラスは柳の林を飛び回る。日ごとに暖かくなり、毎日少しずつ楽しい気分が増してくる。柳絮が空いっぱい、地に向かって飛び、まるで綿の花のようだ。人々は家を出るとだれもみな手を伸ばして捉まえ、柳絮はその人の体にくっつく。草や牛糞は路上で強烈な匂いを発する。遠くで石槌で舟を作る音がコンコンと大きく響いてくる。

河の氷は解け、氷塊が氷塊を押し上げ、もだえ、また解き放たれて下流に向かう。カラスが氷塊にとまり小魚を食べようと探している。あるいはまだ冬眠中の蛙を。

急に暖かくなる。いわゆる「二月八月、小春日」で、おのずと寒い日がまた戻って来るだろうが、しかしこの数日は暖かくなった。いたるところで春はその訪れをさかんに触れ回る。

小さな街は柳絮におおわれ、ニレの木がまだ黄色く変わる前に、それは大通りにも路地にも飛んで来て、あたかも降りしきる雪片のよう……。

春が来た。人々は大きな蜂起を久しく待っていたかのように、今夜立ち上がるだろう。人々は罪を犯すような心持で、解放の試みに参加しようとする……春は人々の心に、呼びかけ、惑わし、吹き込むのだ。

私にはおばがひとりいた。彼女は私の従兄に恋をしていたようだ。

おばといえば本来はとても近い親族、つまり母の姉妹だ。でもこのおばは私と血がつながったおばではなく、私の継母の、そのまた継母の娘だった。それなら彼女と私の継母は血縁があるといってもよいはずだが、実際はそうではなかった。というのは私のこの母方の祖母は寡婦になったあと祖父の家に再縁したからだ。翠叔母はこの祖母がもともとの別の婚家で産んだ娘であった。

翠叔母には妹もいた。妹は彼女の二歳下で十七、八歳ぐらいだったから、翠叔母も十八、九歳にはなっていた。

翠叔母は特別に美人というのではなかったが、たおやかで、歩くときには落ち着いて美しく、話しはじめると一種の穏やかな感情をはっきり表した。彼女が桜桃を食べようと手を伸べるとき、桜桃にさわる指先は優しい様子で、こわすのを怖れるようにそっとつまむのだった。

もし後ろから声をかける人があれば、彼女は歩いていればすぐに立ち止まり、ご飯を食べていれば茶碗をおいて、それから自分の肩越しに振り返る。全身を大きく回すのではなく、しっかりと唇を結んで、まるで何か言いたいことがあるのに、ちょっと口から出てこないというふう……。

また、翠叔母の妹は、名は忘れてしまったが、よくしゃべり、よく笑い、飾り気がなく、どのみち姉とは全然似ていなかった。柄物でも緑色でも、赤でも紫でも、町で流行しさえすれば彼女は迷うことなく選んでその着物を早々に身に着けた。それを着て親戚の家に遊びに行き、みんながなんてすてきなんでしょうとほめると、彼女はいつも、これとまったく同じもの

がもう一枚あって、姉さんにも上げたのよと言うのだった。

私が母方の祖父の家に行っても、そこには私と遊んでくれるような同じ年頃の女の子はいなかったから、私が行くたびに、祖母は翠叔母を呼んで私につきあわせた。

翠叔母は祖父の家の裏庭の家に住んでいた。板塀一枚隔てただけだったので一声かけると、すぐに聞きつけて来てくれた。

祖父の家と翠叔母の家は板塀一枚隔てただけといっても通り抜けられる門はなかったので、ぐるりと回って大通りに出て正門から入ってこなくてはならない。

そこで、時には翠叔母はまず板塀のところに来て、板塀の隙間から私に一声かけて、それから家に戻ってしっかり身づくろいをし、大通りから外囲いをぐるりと回って彼女の母親の家に来るのだった。

翠叔母は私を好きだった。というのも、私は学校で勉強していたが、彼女はそうではなく、何でも私のほうがよくわかっていると思っていたからだ。だから彼女はいつもどんなことも私に相談し、私の意見がどうか知ろうとした。

夜になって、私が祖父の家に泊ることになると彼女も私といっしょに泊った。

いつも眠りにつくまで話して、夜中まで話したこともある。どうしてそんなに話すことがあったのかわからないが……

はじめのころ話したのは、洋服をどんなふうに着るか、どんな色がいいか、どんな布地がいいか。たとえば、歩くときは速く歩くほうがいいのか、それともゆっくりか。あるときは昼間彼女が買ったブローチを、夜になると出して見せ、すてきかどうかと私に聞いた。その当時、だいたい十五年前のことだが、私たちはよそで女の子がどんな装いをしているかは知らなかったけれど、この街ではほとんどの女性がゆったりした毛糸編みのストールをしていた。青いのや紫やいろいろな色のがあったが、一番多かった

のは棗紅色〔なつめの実のようなくすんだ赤色〕だ。街で見かけるのは、ほとんどが棗紅色の大きなストールだった。

たとえ赤や緑のがどんなに多かったとしても棗紅色の流行には及ばなかった。

翠叔母の妹も一枚持っていたし、翠叔母も持っていた。私の同級生たちもほとんど皆一枚ずつ持っていた。日ごろ派手好みではない母方の祖母の肩さえもストールで被われていた。ただ、それは青いものだったが、思い切って最新流行の棗紅色にしなかったというだけなのだ。祖母は何といつてもちょっと歳をとっていたので若者に一步譲ったというわけだ。

そのころはまた、毛糸編みの室内履きを履くのもはやっていた。翠叔母の妹は早速買って履いた。彼女はなんとも大雑把な人なので、どちらにしろ、ただ人が持つものは自分も持つということにすぎず、他の人は人が衣裳を着るのだが、翠叔母の妹はまるで衣服に着られているようでだらしなかった。ただいつも持てるものはすべて持つというのが彼女の流儀だったのだ。

翠叔母の妹のその室内履きは、外で買ってきて、履くようになったものだ。床板を駆け回り、ほんのちょっとの間に、甲についていた房飾りの片方は取れてしまい、飛び上がると、ただ一本の紐でつながっているか、でなければ落ちてしまう。それはこっけいで、まるで大きな棗の実が足に縛り付けられているようだった。というのも彼女の室内履きも棗紅色だったからだ。みんなは買ってすぐにだめになってしまった彼女の履き物をバカにして笑った。

翠叔母はといえば、買わなかった。彼女は長くためらい、どんなに新式のも物が現れても、そんなに早く買いに行くことはなかった。心の中では欲しかったのかもしれないが、見たところはそんなふうではなく、欲しそうなようすはなかった。

彼女は必ず、多くの人がことを始めるまでは待っているのです、このこ

ろ、ようやくちょっと室内履きに心を動かされたというふうだった。

たとえば室内履きを買うことについて、夜、彼女は私に話して意見を聞いた。私も、それはとてもきれいだし、私の同級生たちもほとんどみんな室内履きを買ったと話した。

次の日、翠叔母は私に街までついてきてと言い、何を買うのかは言わないまま店に入って長い間別のものを選んだあと、ようやく室内履きの靴のことを言い出した。

何軒かの店に行ったが室内履きはどこにもなく、すべて売り切れとのことだった。私には店員が嘘をついているのがわかった。彼はこの店はいつも品揃えがいいのだが、ちょうどこれだけが品切れになってしまったというのだ。私は翠叔母に落ち着いて探しに行きましょう、きっと別の店にあるわと勧めた。

私たちは街はずれの祖父の家から街の中心まで馬車に乗った。

最初の店を見て私たちはすぐに馬車を下りた。いうまでもなく、私たちはすでに馬車賃は払っていた。買い物をすませて戻るときには別の馬車を頼めばよい。どのくらい時間がかかるかもわからなかった。だいたい何かいいものを見つけると、必要なものでなくてもちょっと買いたくなるし、またもう買ってしまって心に残す必要がないものでも、やはりちょっと名残惜しくなる。また買い物の目的はもともと一足の靴だけなのにもかかわらず、結局靴を買うことはできず、逆にうろうろと、たくさんの要りもしないものを買ってしまうのだ。

この日、私たちは馬車を断って、一軒めの店に入った。

ほかの大きな町ではこんなことはないかもしれないが、私の郷里では往々にしてこんなことがおこる。つまり、馬車に乗り、お金を払ってしまって、御者に自由に客をひかせても、彼はしばしば客が店を出てくるのを待っていて、またその馬車に乗せようとするのだ。

私たちは一軒めの店に入った。聞いたが室内履きはなかった。それでい

くつかの別の品を見た。シルクから毛織物を見ていき、毛織物からシルクを見る。母親たちが店に入って、これはシーツにしようか、あれは綿入れをつくろうかと見るときとはとは違って、綿布はまったく見なかった。というのは私たちはシーツや綿入れにはかかわりがなかったからだ。母親たちは一カ月も買物に行かず、いったん行くと、また、これが安いから買わなくては、あれは高くないから買わなくてはとなる。たとえば、夏になってはじめて必要になる花模様の布を、母親たちは冬のうちに買ってしまうのである。安いうちにたくさん買っておけば、いずれ必要になるというわけだ。でも私たちはそうではない。毎日店に行き、毎日すてきなものを探す。値段は張っても、ふだん絶対に使わないような思いがけないものを。

その日私たちはたくさんの縁飾りのテープを買って帰った。スパンコールやビーズがついたのなど、こんな縁飾りをあしらってどんな洋服をつくれるのかはわからなかったが。ひょっとすると、そもそも洋服をつくることさえ考えもせず、ただ軽い気持ちでテープを買ってしまった。買いながら、これがすてきだわと言い、翠叔母がいいわねといえ、私もいいわと言いあった。そのあとで家に帰り、みんなの前で開いて見せてどう？と聞いたのだが、この一言、あの一言、みんなに言われてバカな買い物をしてしまったと思え、自信がなくなってしまった。それですぐに片付けはじめ、別の人を持っていたのは取り返し、包んでしまい、彼女たちには見る目がない、彼女たちには見せないと言った。

ちょっと無理してこんなことも言った。

「私たちは紅金色のビロードの長い上着を作りたいわ。この黒いビーズのついたのを縫い付けて」

あるいは、

「この赤いのは人にあげよう……」

そうはいってもやはり、自信はほとんど失われ、それで、そんなふう好きなものでも、それ以後は人に見せることはしなくなった。

この小さな町には結局のところ店はあまりない。その後も毛糸の室内履きは見つからず、気持ちは焦った。さらにもっと走り、少なくない時間を費やし、ただ二、三軒が残るだけになった。でもその二、三軒は、あいにく普段は行かない店で、店も小さいし、品物も少ない。そんなところで見つかるはずがないと思われた。

私たちは一軒の店に入った。果たして三、四足あったのは、小さくなければ大きすぎ、色もみなあまり良くなかった。

翠叔母がしきりに買ったがるのが、私には不思議だった。もともとたいして好きでないのだし、良いのがないのに、どうしてそんなに買いたいの？、私にそう言われて、彼女は結局買わずに帰ることになった。

二日すぎて、私は室内履きを買いに行くことなどもう忘れていた。

翠叔母は突然、また行こうと言い出した。

このことから、私には彼女の秘密、彼女がずっと前からその室内履きが好きだったのに、言い出せなかったのだということがわかった。彼女の恋愛の秘密もいわばこんなふうで、彼女はそれを墓まで持っていくつもりらしく、決して口に出そうとはせず、この世界に誰一人彼女の話だけを聞けるだけの値打ちがある人はいないようだった……。

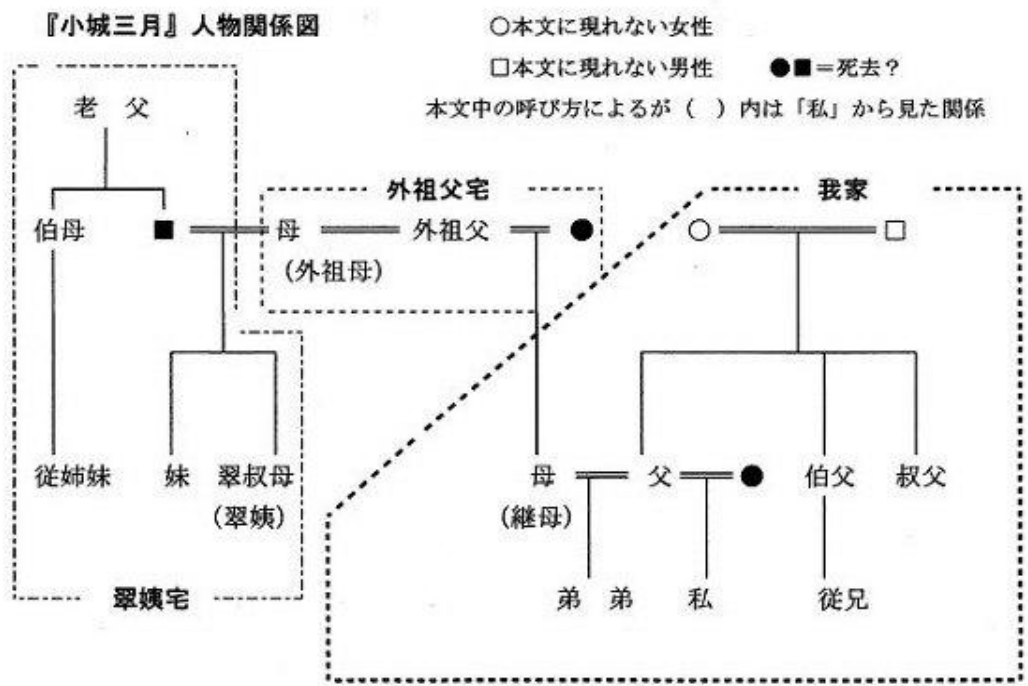
大雪が降る日、私と翠叔母は馬車に乗って毛糸編みの室内履きを買いにいった。私たちは毛皮の敷物で体をつつみ、馬車を御す車夫は御者席に高々と座り、体を揺らせながらしゃがれ声で民謡を「へーレーレー」と歌う。耳元を吹く風はひゅうひゅうと鳴り、天を傾けたように降る大雪が目をも曇らした。はるかな天は雲霧の中に隠れ、私は黙って翠叔母が早く可愛い室内履きを買えるように祈った。私は心から彼女の力になりたかった……。

繁華街ははるかにぼんやりかすんでおり、行く人もなく、街中が音もなく静まり返っていた。私たちは一軒一軒聞いていった。私は早く靴を買おうと、彼女より焦っていた。私は注意深く店員を問い詰め、ちょっとした

機会も逃さず、翠叔母を励まし、一軒たりとも寄るのを忘れなかった。彼女をちょっといぶかしがらせるほど、なぜか私はとても熱心になり、彼女の不審をもまったく意に介さず、一切を顧みずこの小さな街で、一足の室内履きを探し出そうとした。

私たちの馬車だけが、翠叔母の望みを乗せて、街をとりわけ明快に、とりわけ速く走った。雪はさらにはげしく降り、街には何もなく、ただ私たち二人が車夫をせかし、行ったり来たり走り回った。日がすっかり暮れても、ずっと室内履きは見つからなかった。翠叔母は私の目をしみじみと見つめ「運がなかったんだわ」と言った。私は大人っぽくふるまって彼女をなぐさめようとしたが、適当なことばを何も見つけ出せず、涙があふれ出た。

.....



是我的亲姨，她是我的继母的继母的女儿。那么她可算与我的继母有点血统的关系了，其实也是没有的。因为我这个外祖母是在已经做了寡妇之后才来到的外祖父家，翠姨就是这个外祖母的原来在另外的一家所生的女儿。

翠姨还有一个妹妹，她的妹妹小她两岁，大概是十七八岁，那么翠姨也就是十八九岁了。

翠姨生得并不是十分漂亮，但是她长得窈窕，走起路来沉静而且漂亮，讲起话来清楚的带着一种平静的感情。她伸手拿樱桃吃的时候，好像她的手指尖对那樱桃十分可怜的样子，她怕把它触坏了似的轻轻地捏着。

假如有人在她的背后招呼她一声，她若是正在走路，她就会停下；若是正在吃饭，就要把饭碗放下，而后把头向着自己的肩膀转过去，而全身并不大转，于是她自觉地闭合着嘴唇，像是有什么要说而一时说不出来似的……

而翠姨的妹妹，忘记了她叫什么名字，反正是一个大说大笑的，不十分修边幅，和她的姐姐完全不同。花的绿的，红的紫的，只要是市上流行的，她就不大加以选择，做起一件衣服来赶快就穿在身上。穿上了而后，到亲戚家去串门，人家恭维她的衣料怎样漂亮的时候，她总是说，和这完全一样的，还有一件，她给了她的姐姐了。

我到外祖父家去，外祖父家里没有像我一般大的女孩子陪着我玩，所以每当我去，外祖母总是把翠姨喊来陪我。

翠姨就住在外祖父的后院，隔着一道板墙，一招呼，听见就来了。

外祖父住的院子和翠姨住的院子，虽然只隔一道板墙，但是却没有门可通，所以还得绕到大街上去从正门进来。

因此有时翠姨先来到板墙这里，从板墙缝中和我打了招呼，而后回到屋去装饰了一番，才从大街上绕了个圈来到她母亲的家里。

翠姨很喜欢我，因为我在学堂里念书，而她没有，她想什么事我

都比她明白。所以她总是有许多事务同我商量，看看我的意见如何。

到夜里，我住在外祖父家里了，她就陪着我也住下的。

每每从睡下了就谈，谈过了半夜，不知为什么总是谈不完……

开初谈的是衣服怎样穿，穿什么样的颜色的，穿什么样的料子。比如走路应该快或是应该慢。有时白天里她买了一个别针，到夜里她拿出来看看，问我这别针到底是好看或是不好看，那时候，大概是十五年前的时候，我们不知别处如何装扮一个女子，而在这个城里几乎个个都有一条宽大的绒绳结的披肩，蓝的，紫的，各色的也有，但最多不过枣红色了。几乎在街上所见的都是枣红色的大披肩了。

哪怕红的绿的那么多，但总没有枣红色的最流行。

翠姨的妹妹有一张，翠姨有一张，我的所有的同学，几乎每人有一张。就连素不考究的外祖母肩上也披着一张，只不过披的是蓝色的，没有敢用那最流行的枣红色的就是了。因为她总算年纪大了一点，对年青人让了一步。

还有那时候都流行穿绒绳鞋，翠姨的妹妹就赶快地买了穿上。因为她那个人粗心大意，好坏她不管，只是人家有她也有，别人是人穿衣裳，而翠姨的妹妹就好像被衣服所穿了似的，芜芜杂杂。但永远合乎着应有尽有的原则。

翠姨的妹妹的那绒绳鞋，买来了，穿上了。在地板上跑着，不大一会儿工夫，那每只鞋脸上系着的一只毛球，竟有一个毛球已经离开了鞋子，向上跳着，只还有一根绳连着，不然就要掉下来了。很好玩的，好像一颗大红枣被系到脚上去了。因为她的鞋子也是枣红色的。大家都在嘲笑她的鞋子一买回来就坏了。

翠姨，她没有买，她犹疑了好久，无管什么新样的东西到了，她总不是很快地就去买了来，也许她心里边早已经喜欢了，但是看上去她都像反对似的，好像她都不接受。

她必得等到许多人都开始采办了，这时候看样子，她才稍稍有鞋

动心。

好比买绒绳鞋，夜里她和我谈话，问过我的意见，我也说是好看的，我有很多的同学，她们也都买了绒绳鞋。

第二天翠姨就要求我陪着她上街，先不告诉我去买什么，进了铺子选了半天别的，才问到绒绳鞋。

走了几家铺子，都没有，都说是已经卖完了。我晓得店铺的人是这样瞎说的。表示他家这店铺平常总是最丰富的，只恰巧你要的这件东西，他就没有了。我劝翠姨说咱们慢慢地走，别家一定会有的。

我们是坐马车从街梢上的外祖父家来到街中心的。见了第一家铺子，我们就下了马车。不用说，马车我们已经是付过了车钱的。等我们买好了东西回来的时候，会另外叫一辆的。因为我们不知道要有多久。大概看见什么好，虽然不需要也要买点，或是东西已经买全了不必要再多留连，也要留连一会儿，或是买东西的目的，本来只在一双鞋，而结果鞋子没有买到，反而罗哩罗嗦的买回来许多用不着的东西。

这一天，我们辞退了马车，进了第一家店铺。

在别的大城市里没有这种情形，而在我的家乡里往往是这样，坐了马车，虽然是付过了钱，让他自由去兜揽生意，但是他常常还仍旧等候在铺子的门外，等一出来，他仍旧请你坐他的车。

我们走进第一个铺子，一问没有，于是就看了些别的东西，从绸缎看到呢绒，从呢绒再看到绸缎，布匹是根本不看的，并不像母亲们进了店铺那样子，这个买去做被单，那个买去做棉袄的，因为我们管不了被单棉袄的事。母亲们一月不进店铺，一进店铺又是这个便宜应该买；那个不贵，也应该买。比方一块在夏天才用得着的花洋布，母亲们冬天里就买起来了，说是趁着便宜多买点，总是用得着的。而我们就不然了，我们是天天进店铺的，天天搜寻些个是好看的，是贵的值钱的，平常时候绝对的用不到想不到的。

那一天我们就买了许多花边回来，钉着光片的，带着琉璃的。说

不上要做什么样的衣服才配得着这种花边。也许根本没有想到做衣服，就贸然地把花边买下了。一边买着，一边说好，翠姨说好，我也说好。到了后来，回到家里，当众打开了让大家评判，这个一言，那个一语，让大家说得也有一点没有主意了，心里已经五六分空虚了。于是赶快地收拾了起来，或者从别人的手中夺过来，把它包起来，说她们不识货，不让她们看了。

勉强说着：

“我们要做一件红金丝绒的袍子，把这个黑琉璃边镶上。”

或是：

“这红的我们送人去……”

说虽仍旧如此说，心里已经八九分空虚了，大概是这些所心爱的，从此就不会再出头露面的了。

在这小城里，商店究竟没有多少，到后来又加上看不到绒绳鞋，心里着急，也许跑得更快些，不一会儿工夫，只剩了三两家了。而那三两家，又偏偏是不常去的，铺子小，货物少。想来它那里也是一定不会有的了。

我们走进一个小铺子里去，果然有三四双，非小即大，而且颜色都不好看。

翠姨有意要买，我就觉得奇怪，原来就不十分喜欢，既然没有好的，又为什么要买呢？让我说着，没有买成回家去了。

过了两天，我把买鞋子这件事情早忘了。

翠姨忽然又提议要去买。

从此我知道了她的秘密，她早就爱上了那绒绳鞋了，不过她没有说出来就是。她的恋爱的秘密就是这样子的，她似乎要把它带到坟墓里去，一直不要说出口，好像天底下没有一个人值得听她得告诉……

在外边飞着满天得大雪，我和翠姨坐着马车去买绒绳鞋。我们身上围着皮褥子，赶车的车夫高高地坐在车夫台上，摇晃着身子唱着沙

哑的山歌：“喝咧咧……”耳边的风呜呜地啸着，从天上倾下来的大雪迷乱了我们的眼睛，远远的天隐在云雾里，我默默地祝福翠姨快快买到可爱的绒绳鞋，我从心里愿意她得救……

市中心远远地朦朦胧胧地站着，行人很少，全街静悄无声。我们一家挨一家地问着，我比她更急切，我想赶快买到吧，我小心地盘问着那些店员们，我从来不放弃一个细微的机会，我鼓励翠姨，没有忘记一家。使她都有点儿诧异，我为什么忽然这样热心起来，但是我完全不管她的猜疑，我不顾一切地想在这小城里，找出一双绒绳鞋来。

只有我们的马车，因为载着翠姨的愿望，在街上奔驰得特别的清醒，又特别的快。雪下的更大了，街上什么都没有了，只有我们两个人，催着车夫，跑来跑去。一直到天都很晚了，鞋子没有买到。翠姨深深地看到我的眼里说：“我的命，不会好的。”我很想装出大人的样子，来安慰她，但是没有等到找出什么适当的话来，泪便流出来了。

